

大正・昭和初期の「民話」とその思想

— 水野葉舟や農民文芸運動を視野に —

野村 典彦

(1)

武者小路実篤『童話劇三篇…地蔵と鬼・かちく山・花咲爺』は、一九二一年（大正十）に新潮社から刊行されている。挿絵は岸田劉生。奥付の次の頁には「第一選集 小さき世界（第六版）」他、「武者小路実篤氏著」の書名が並べられている。新潮社の広告である。次の頁には「トルストイ著・昇曙夢氏訳」の「人は何によつて生くるか」（七拾銭）の広告。見出しは「童話劇」の読者に是非読んで貰ひたいトルストイ民話集」。ボデニコビーの冒頭は「平俗な面白お話のなかに、無限の教訓を含んで居るトルストイの民話は、世界の人々を教化するに於いていかばかり力あつたか、測り知れぬ程であります」。武者小路実篤がトルストイに惹かれていたのはよく知られるところ、ここで注目したいのは、大正の終わり頃、「民話」という語がトルストイの文学・思想を翻訳する傍らにあった、ということがある。昇は「口碑文学」や「お伽噺」の語を用いることが多かった

が、一九一九年、家庭読物刊行会『世界少年文学名作集第二巻トルストイ物語』の訳にあたっては、「お伽篇」「物語篇」「民話篇」の部立てをしており、「序」では「民話篇」はトルストイが一八七七年の夏オプチン修道院に滞在してゐた時、そこで民話をよく知つて居る巡礼から聞いたさまざまの貴い物語を材として書いたもの」と記している。それよりも前、『新潮』一九一七年九月号や、新潮社発行『トルストイ研究』第三巻第七号に掲載の、昇曙夢訳『人は何によつて生くる乎』（トルストイ小話文庫）・貳拾五銭・新潮社）の広告も、「トルストイの民話を云ふもの、先づ第一に指を屈するは、即ち此の一篇である」と、その出版物は「民話」の語を用いて紹介されている。

他の訳者では、同じ「小話文庫」、衛藤利夫訳『火を等閑にせば』（一九一七年）が、巻頭の「解題」において、次のように記す。「最後の一句、『彼はその後長く幸福に生活した、』といふのは、日本の『めでたしく』といった風に好んで用ゐらる、言葉であるが、その『生活した、』——生きた、といふ一語がこ、

ではいろんな意味に於て読者に訴へるのである。この物語は最近刊のトルストイ集では二度出て、一方では、『お嘶し、遙か昔しヴオルガ河畔に起つた民話から、』といふ題になつて居る」と。個々の事例は省略するが、一九一六年から二〇年代にかけて、さまざまに出版されるトルストイ関連の書籍に「民話」の語を見ることができる。

内田魯庵が、丸善の『学燈』に翻訳「馬鹿者イワン」連載を始めたのが一九〇二年（明治三十五）。書籍として刊行された内田訳「イワンの馬鹿」についての評が『家庭雑誌』第四卷第二号（一九〇六年）に見える。「トルストイの有名な寓意談を訳したも。世の中は黄金でも兵隊でも治まらぬ、只だ馬鹿の如く労働する者が最後の勝利を得るといふ話。労働主義、農本主義、平和主義、無抵抗主義の福音として、トルストイの思想の大体を見るには最も適当な書である。（価廿銭、牛込山伏町火鞭会）。「雪姫物語（上）」（白柳秀湖訳）も載る雑誌の巻末には、この書の広告が掲載されており、「再版出来」等の大文字に囲まれる形で、「勝に傲る者よ、講和に嘖る者よ、権力に渴する者よ、富貴に淫する者よ、生活に勞る、者よ、真理に悶ゆる者よ」「此渺たる小冊子を読んで馬鹿者イワンの愚なる生涯に一大教訓の潜蔵するを發見せよ」のコピーが並ぶ。火鞭会は、「日露戦争のさい、辛徳秋水・堺利彦らの平民社を中心集つた社会主義的青年文学者」（西田 一九八五）による組織で、機関誌『火鞭』の第二号から第四号（一九〇五年）に、「馬鹿者イワン」の書名で出版

予告がある。トルストイの思想が紹介されるその向こうに、日露戦争に昂揚する日本社会が透けて見える。

吉田精一は「明治末年の思想家、評論家を新しく動かしたのは、「復活」をのぞくならば、晩年の民話類や、人生論など、多くは宗教的転向以後の思想であつた」（吉田 一九五八）と述べている。例外として『復活』が挙がっているのは、島村抱月脚本の芸術座の公演が、主演の松井須磨子が歌う「カチューシャの唄」とともに、一九一四年（大正三）から全国的な人気を博したことをさすと思われる¹⁾。

柳富子は、内田魯庵が「馬鹿者イワン」（「イワンの馬鹿」）を翻訳した際には、「民話なるもののジャンル意識が欠落している」状況だったという。「民話という概念が日本で定着するのはこれ以後のことであり、巖谷小波の仕事と関連させて考えねばならない」とのこと（柳 二〇〇五）だ。

大正期の『新潮』には、武者小路実篤や昇曙夢、当時の言葉で言うところの「トルストイアン」であつた加藤一夫、こうした人々の文章が頻繁に掲載されていた。一九一八年六月号では、加藤の唱える「民衆芸術」を考察する文章が巻頭に並べられ、トルストイを意識しながら、その意義の確認、あるいは加藤への批判が行われている。

一九一三年四月号では、水野葉舟が「此れまで日本に価値のあるお伽嘶が書かれて居たか」と問うている。そして「子どものお歌ふ唄として日本には立派な歌がないのである」と言う（郊

外から」。水野が少年文学を考える際に軸にしているのが「お伽噺」と「唄」であること、そしてそれが作家によって創作されるべきということが、ここには示されている。うたをめぐる議論についてはこのあと触れることにするが、一九一六年四月号には「露西亞の民謡」(瀬戸義直)が紹介されている。水野の文章の中には、露西亞の雑誌に少年文学の無き国として日本のことが取り上げられている旨を昇曙夢から聞いた感想も記されていた。その昇は、巖谷小波の著作を幾冊も刊行している大倉書店から、全五冊「露国民衆文学全書」として『ろしあお伽集』『ろしあ伝説集』『ろしあ童話集』『ろしあ民謡集』『ろしあ俚諺集』を一九一八〜二〇年に刊行している。ロシアの「民衆文学」として民謡や俚諺を含みながら口承文芸を紹介する書物があることを忘れずにいたい。

(2)

「近頃少年少女の雑誌がありました、此処にお出での若い方は巖谷小波先生のお伽噺をお読みになりましたらうが、我儕と同年の人は或はさうでなかつたらうと思ひます。」「私の言ふお伽噺は、四号活字で出来て居るお伽噺でない、本で覚えたのでなく人から聞いたものである」と、上田敏が述べたのは一九一四年「お伽噺考」。「小波の叔父さん」(柳田 一九三五)の「童話」を柳田の昔話研究は肯定しなかった。ただし、先ほど『家庭雑誌』を引用した通り、近代の日本に、「家庭」あるいは「お話」の世界、の

構築が試みられていた(重信 二〇〇三)ことを忘れてはなるまい。「民話という概念」には、いますこし慎重である必要がある。そもそも、トルストイの「民話」にしても、今日にあつては二十篇の作品に厳密に限定されている(高山 一九九二)ものの、「この一群に準ずべき作品は、それ以前にも以後にもあり、童話または少年物語と民話との間に明確な一線を画することもむずかしい」(本多 一九五一)という説明もなされてきた。一九二七年、春秋社内トルストイ全集刊行会発行『普及版トルストイ全集』三七、三八(加藤一夫ほか訳・奥付に示された著作者は神田豊穂)は、表紙に「伝説・民話・童話」と示す。

さらに、その呼称について、一九〇〇年代以来、トルストイ作品を紹介する際に用いられた語は「童話」「小話」「小説」などであり、一九一六年五月、塚本弘訳『トルストイ民話集』(洛陽堂)や、同年秋の『トルストイ研究』第一号に掲載された「トルストイ年譜」に「一八八一年(五十三歳)―民話「人は何によつて生くる乎」の作あり」と示されているあたりから「民話」が増えていくと判断できる。言い添えておけば、洛陽堂は『白樺』を刊行する出版社である。

この頃の『新潮』には、自社の出版物はもちろん、国民書院の出版物など、トルストイの著作の広告が複数掲載されていた。一九一六年六月号には洛陽堂が『トルストイ民話集』の広告を出した。『トルストイ研究』創刊号の広告は九月号巻頭に掲載され、同号には発刊を告知する記事もある。

徳富蘆花の『トルストイ研究』購入順が、まず第二号だったことについて、「一号の入手が遅れたのは、それが再版まですぐに売り切れ、五版まで出たほどの人気ぶりだったからであろう」との推測〔阿部 一九八九〕もある。塚本訳『トルストイ民話集』の刊行は、「カチューシャの唄」の流行とともに、トルストイの文学が極めて高い関心を集める中でのことだったと言えよう。

この塚本訳書の受容の一例として、一九二八年の『新定国文学読本参考書巻一』（東京高等師範学校附属中学校内 国語漢文研究会編・目黒書店）を確認できる。芥川龍之介「蜘蛛の糸」「蜜柑」、夏目漱石「猫の作戦計画」などが並ぶ最後に「日の入るまでトルストイ民話集」が、唯一の外国文学として収載されている。出典が塚本訳の『トルストイ民話集』であることが明示され、解説にも「民話」の語が用いられている。

一九一九年、『自己を生かす為に』（新潮社）に収められた「花咲爺に就て」において、武者小路実篤は「この唄は面白い唄だとその時思つた。トルストイでもよろこびさうな話だと思つた。「花咲爺」は無抵抗主義の実行者だと思つた」と述べた。教会すらも「非戦」ではなかつた日露戦争前後の時期であるから、「無抵抗」を唱えるトルストイ思想の享受は難しい。だが、間違ひなく、文字を織る日本人にトルストイの作品は大きな影響を与えていた。

(3)

キリスト教文化の啓蒙宣伝（杉井 一九七三）を行う総合雑誌

である『六合雑誌』は、一九〇五―六年に佐々木祐継の翻訳によってトルストイの文章を複数掲載した。一方、同志社の総長となる海老名禪正が主筆をつとめていた本郷教会の雑誌『新人』第十八巻第一号（一九一七年）に、香川鉄蔵が「ロシア民話に現れたキリスト」を寄稿し「民話」の語がみえる。ちなみに香川は一九一八年にラーゲルレーヴ『飛行一寸法師』を翻訳し大日本図書から刊行、一九五四年には『ニルスのふしぎな旅』として創元社や講談社の全集に抄訳・完訳を収めた。

一九二一年に精華書院から刊行された世界童話名作集 第五篇『黄金の河』（保高德蔵訳）の「まへがき」は、「巻頭の「黄金の河」は英国の評論家であり哲学者である、有名なジョン・ラスキンのたつた一つの童話であります」と始まり、「後の三篇は、ロシアの民話を英国の童話の大家リチャードウ井ルソン氏が英文に書きかへたのを重訳したものです」と記される。「グリム童話」同様に「ロシア（の）民話」も安定した熟語として消費されていた可能性がある。

一九二六年、『伝説』第一巻第一号に蘆谷蘆村は「ペテル・ギントの話（ノールウエー民話）」を掲載している。編集段階で付された題かもしれないが、伝承されている海外の説話を翻訳する際の「民話」の用例と判断できるだろう。蘆谷は、一九三五年の書物の中では、「民話」の語も用いながら世界各地の伝承の調査状況を詳細に紹介する。そして、「かくの如くに豊富なるロシアの民間説話と、特異なるロシア芸術とは、相俟つてロシア

に多くのすぐれたる芸術童話を生んだ。クルイロフの如き、トルストイの如き、ソロゲーフの如きいづれも世界の童話界に卓然傑出せる童話のロシアに生れたること」に触れる。「民間説話を素材として行われる「芸術童話」というロシアにおける創作活動を評価している〔蘆谷 一九三五〕。

同じ頃、一九三五年の、ヴェンセスラオ・デ・モラエス『日本精神』の日本語訳（第一書房）の中で花野富蔵が「民話」を使っており、さらには、翌三六年度の『昔話研究』第十二号に掲載された柳田国男「昔話覚書」にも「例へば独逸で J.G.v.Halm が、希臘アルパニヤの民話と共に公表した一案の如きは、既に七十年度の昔の説であり」と「民話」の用例がある。海外の民間説話を話題にする際の「民話」の語が、この頃には一般化していたと考えられる。

関敬吾が指摘した〔関 一九七七〕通り、文野白駒（岩倉市郎）『加無波良夜譚』を評する柳田の文章（後に『退読書歴』に収められる）が『東京朝日新聞』に掲載された際（一九三二年三月十八日）、付されていた原題は「貫い越後の民話集」だった。新聞編集に携わる人々の間に、あるいは新聞を読む人の間に、「民話」という言葉が既に浸透していたと推測される。それは、文学雑誌や外国文学の翻訳を通じて世の中に受け入れられたものだったはずだ。

(4)

ここで、一九一四年（大正三）、柳田国男『山島民譚集』も見ておきたい。「神々降臨ノ跡」の節に、「板二描キタル絵馬ヲ大切ノ物ニシタマヒシコトハ、古キ民話ニモ見エタリ（今昔物語十三等）」という用例がある。

一九一三年『郷土研究』第一巻第一号に赤峯太郎の筆名で高木敏雄「今昔物語の研究」が「伝説童話」の他に「民間説話」の語を用いた。所謂「唄い骸骨」譚などを「支那印度からの翻案」と述べたのに続け「宗教的の臭味を全くもたぬ民間説話の範囲に於ても、同一の事実が或程度まで現はれてゐる」との使い方である。同年に刊行された芳賀矢一『攷証今昔物語集』巻上（富山房）の序論は「民間説話として口碑に伝わり、それが後の文学の材料になつた」と記す。これも、仏教を説く話ではないものとして「民間説話」の語を用いたものと考えてよいだろう。この他、南方熊楠が『今昔物語集』の出典に強い関心を持っていたことは、飯倉照平や小峯和明が明らかにしている（飯倉二〇一三）。「山島民譚集」の「民話」には、経典などの文字によって伝来したものではない説話という印象が窺われる。

こうした用例を確認しておくと、一九四一年、中島悦次「宇治拾遺物語の民話性」が理解しやすくなる。「宇治拾遺物語の説話は伝説と民話とに二大別し得ると思ふ」と述べた上で、『今昔物語集』と比較し、「宇治拾遺の方は民話と称し得るものが相当

ある」とする。仏教という思想と対比されて配置される「民間」。そうした「民話」も説話文学研究の文脈には存在したのだった。

この論文が掲載された『国語と国文学』第十八巻十号は「中世説話集の研究」特集号である。巻頭に置かれた齋藤清衛「中世説話文学と意欲表象」は、「すべて文学は、口承的音声的要素を主とするものと、書写的文言的要素を主とするものとの両面に分けて考へることが出来る。伝説・民話・歌謡の文学が、その前者の方を代表してゐる」という。こちらの論文は、文字を操る知識階級の文学の対岸に「歌謡」や「民話」を配置した。

文字に記された説話を遡源する研究において「民話」の語を用いる例として、明治の末に上田敏の用例がある。「伊曾保ぶり諭言の起源を探らう」とするなかで「所謂俗説学 Folk-lore の根本問題に触れざるを得ない。こゝでまづすべての民話俗説の説明に關する態度を明言して置きたい」と述べた。その後の箇所でも「伝説民話或いは殊に動物譬喩談が、あのやうに相一致し相酷肖するのは」という使い方をしている（上田 一九二二）。

天竺・震旦の説話と比較するのか、はたまた泰西までを視野に入れるのか、起源を意識しながら文字の説話と向き合う研究の中にも、「民話」の用語があったのである。

(5)

一九二〇年代のトルストイ受容に戻る。この頃にあつて、トルストイ思想の影響を受けている活動として、農民文芸運動が

挙げられる。小牧近江を發起人とする一九二二年十二月のシャルル・ルイ・フィリップ十三周忌記念講演会を契機として、吉江喬松らが集まりを持つようになり、やがて犬田卯を幹事とする農民文芸研究会になつた（犬田 一九五八）。震災後に会としての活動を本格化させ、白鳥省吾らが活動に加わる。白鳥は自らを「民衆詩人」と位置付けた。

一九二六年には農民文芸叢書として、白鳥の『詩と農民生活』、犬田と加藤武雄の共著『農民文芸の研究』が春陽堂から刊行されたほか、『農民文芸十六講』（犬田卯編・春陽堂）も刊行されている。同年八月の『教育研究』第三〇五号は「農村と教育号」である。「農村と文芸」の章は犬田に始まり、伊波普猷や松村武雄などが並ぶ。こうした文章で犬田は繰り返しトルストイの名を挙げ、「百姓生活の現実描写に立脚した農民小説が別にあつてもい、」（犬田 一九二六）と「民話」についての意見を述べる。子供等の美しい空想や純な情緒を優しく育む芸術味豊かな歌に、「童話」に対する「童謡」といふ名を付けて載せてゆくつもりだ」と鈴木三重吉が西條八十に述べたのは一九一八年の夏だという（西條 一九二四）。「家庭」の形成と並行して童話・童謡をめぐる創作活動が行われた大正期に、農民の文学として「民話」「民話」が主張されていたのだった。

ただし、白鳥の創作は否定的な評価をされた。戦後の作家には、「行分け散文詩に過ぎなくて、全く非詩的なもの、非芸術的なもの」という北原白秋の評価があつたため、白鳥作品は「詩

そのものについてよく読んでない」とさえ言われている（大岡一九八五）。北原白秋は、たとえば、白鳥の「地主」を批評している（北原一九二三）。「内容から見ると、農村に於ける哀れな無力で愚直な小作人の百姓が富んで横暴な地主の前に虐げられながら涙を吞んで忍んであるといふ一つの世相が、感じからもよく味はれる。この内容はいい。」「たゞ表現をもつと砕けたものにしてはしかなかった。そこに難がある。ここで考へるのは、これはその儘では読むものにして、民謡では無い」。結論として「民謡は本質に於て「読む民謡」で有る筈は無いのである」とその民謡観を否定された白鳥なのだが、『土の芸術を語る』（一九二五年・聚英閣）から窺うと、農村を訪ねて小作人の言葉を聞き、伝承された民謡に耳を傾けているようである。

さて、フィリップ十三周忌で始動した農民文芸運動のうち、吉江喬松、中村星湖を中心とする一派（牧二〇一八）が、農民文芸会として一九二七年十月に『農民』を創刊。発売所は新潮社。「原稿募集」欄には「小説・戯曲」「評論・感想」「詩・民謡」「短歌」「農村通信」「各地民謡・民謡の研究」が並ぶ。第一巻第三号には今和次郎「農民の住家」、小寺融吉「我が農村舞踊の現況」が載る。第二巻第三号は、柳田国男が「霜夜談」を掲載、「時評」欄では、大槻憲二が小寺融吉編輯の『民俗芸術』を「本誌とさまざまの意味で興味を共有する」雑誌の一つとして紹介している。この号の会員欄では、坪田譲治⁴が加わったことが確認できる。第二巻第四号には昇曙夢が「労農結合の詩人ドロ

ニン」を寄稿、「農民文芸講座」として白鳥省吾が「民謡講話」の連載を始めている。第二巻第六号には小川未明「作物と百姓」、坪田譲治「失はれたる田園」が掲載されている。

(6)

ところで、『農民』創刊号の巻末には一九二七年六月末現在の会員の名が示されていた。その中に水野葉舟の名がある。

博文館の『農業世界』、一九二五年に刊行された第二十巻第十号は「田園と文芸」を特集。巻頭は水野葉舟「農村の文学について（一）」。続いて犬田卯「農人と文芸（一）」。第十二号にはそれぞれの続き。水野は第二十一巻第三号、五号に「藁の穴」雑信」をよせる。目を転じて、窪田通治（空穂）が編輯兼発行人をつとめる『国民文学』を見ると、一九二九年三月の発行の通巻第一六九号には、水野葉舟が「下総開墾の記録（一）」を寄せている。「前書き」の後半は「私は自分の題目をかういふ範囲に限定して考へた。民謡、謡、言葉、動植物、部落の歴史、怪異……」。通巻一七〇号には、「下総開墾の記録（二）」の他に「田舎の住居」と題された文章が「思索と印象」の項にあり、半年間の生活が報告されている。

長女・尾崎実子は、一九一一年（明治四十四）に渋谷へ引越した頃を振り返り、「この渋谷時代から父は精神的にも生活様式にも変化を求めはじめたのではないかと思われる。そしてトルストイに心酔しはじめ、特に晩年のトルストイのヤスナ

ヤ・ポリヤナでの農村生活にあこがれた」〔尾崎 一九六九〕と述べている。

その頃に遡ると、一九一〇年十一月二十五日の『岩手毎日新聞』に、佐々木喜善がトルストイの計報を受けての文章を掲載した。佐々木によれば、水野は「第一の杜翁研究家で、ノートが四五冊もある位」だったという。「その宗教にも文学にもあまり敬意を払つてゐなかつた」と記す佐々木自身は、水野に勧められて数冊を読んだだけだというが、一九一七年十一月十二日の『岩手毎日新聞』には、トルストイの翻訳「朝」を掲載している。炉辺叢書『江刺郡昔話』（郷土研究社）において「民話」の語を用いたのは一九二二年。この時期に文字による発信が可能であった人々にあつて、トルストイの文字・思想は、「農」あるいは「土」という文字とともに、大きな影響力を持ったものだったのである。

水野は『国民文学』そして『郷土研究』に下総からの発信をしていく。「藁の穴」とは、水野が三里塚で始めた農村生活の拠点のこと。「民話」にあたるものは「川津場ばなし」。「馬鹿村のはなし」と称されてゐる噺のセリである」（水野 一九二九b）と、その話を捉えている。

水野は下総に移つて間もない頃、東京に出た際に高村光太郎に『注文の多い料理店』を薦められ、宮沢賢治を知つたという。「私はまづ初めに、宮沢氏の童話の基礎になつてゐるものの一つ、郷土の氣息について考へる。日本の中で、東北は特に民話の伝

承が豊富に保存されてゐる地方であるが、それが宮沢氏にどれほど深い因縁を持つた、——それが氏の童話を読みながら、私に見えるやうに感じられて来る」と述べる。そして、「故人になられた高木敏雄氏、佐々木喜善君を初めとして柳田国男氏、早川孝太郎氏、小池直太郎氏その他の人々によつて蒐集された民話、つまり吾々の民族の持ち伝えて来たはなしに依つて、世間は自分の民族のかたりべが語り伝へた血の伝統を教へられた」（水野 一九三九）と、柳田たちの扱つてゐるものを「民話」と表現している。下総郷土談話会の活動をする水野にとつて、伝承されているものが「民話」であり、「宮沢氏」の創作は「童話」という「芸術の作品」であつた。

(7)

「五萬分の地図——「成田」をひろげて、三里塚を中心とし」た不整形の円を「土地の範囲」（水野 一九二九a）としている水野の「民話」が、「川津場ばなし」であつたのは千葉県の伝承の状況からして納得のできるどころだ。ただし、丸山学の「球磨民話抄」（昔話研究）第一巻第二号、第三号 一九三五）に、「沢右衛門」「弥左衛門」「孫左衛門」「彦市」という固有名詞が目立つことも重ねておく必要があるだろう。丸山は、関敬吾『島原半島民話集』の、全国の類話を視野に入れて整理を試みている点を評価し、「動物説話で始まつて笑話に終る各国の民話配列の順序」による基準説話の公表を提言した（丸山 一九三五）。した

がって、丸山の用いる「民話」は「民間説話」の略と理解される。しかし、佐々木喜善や高田十郎の「民話」が「仮に世間話といふ名を以て」（柳田 一九四三）整理されようとしていたものであったことも踏まえれば、実際に聞き書きに出た人々にとつて、「むかしむかしあるところ」の話だけではなく、固有名詞をもつ話がとても気になるものだった、という整理も可能になってくる。これは、松谷みよ子の「民話」を考える際にも見落とせない。「民話」感覚だということができないのではないか。

早川孝太郎も、「種々な人の話」の章を用意したり（早川 一九二二）、動物に注目して生態系の激変を考えたり（早川 一九二六）、世間話に深い関心を寄せながら聞き書きをしていた。その早川に、「豊後の古右衛門話又は吉五話」といった固有名詞を意識して「民話」を考えたとある文章がある（早川 一九三四）。「吾国では、明治時代に入つてから、外国文学等に刺戟せられて、所謂文学の限界に対する解釈にも、少なからぬ衝動を受けた。智識的に、何等の習練を積まぬ、民間蒙昧の社会に於ける人々の、自然な考へ方、率直な心意に対して、新たな反省が与へられた。農民文学とか、平民文学などの語が唱へられ、考慮され出したのも、その影響と見られる」との表現は、トルストイの翻訳や農民文芸運動への目配りだと考えてよいだろう。その上で、「民話」は「下層社会に、自然に醸成され流布されていた、いわゆる昔話でも伝説でもない、一種の物語りの形式を持ったもの」という自身の「民話」観を提示してゆくのだった。そし

て、与えられた「民話文学」という題に不満をもちます。早川にとつて、伝承されてきた「一種の物語り」は、すでに文学であり、あえて「文学」の語を加える必要のないものであった。

農民文芸運動における「民話」は、民俗学の立場とは異なる。犬田卯は、岡村千秋や郷土研究社の名を示しつつ、そこから出版される「民間伝承を蒐めた叢書」を高く評価した上で、「あまりに自然発生的であり、非科学的であり過ぎ」「民譚なるものを現代的に、且つはつきりした農民イデオロギーの下に生かしたものが、こゝにわれ／＼の意味する民話であるといふことにあります。従つてこれは「新たなる存在」であるといふことを注しなければなりません。民話や農民詩がさうであるやうに、この民話も、また農民文学発生に伴ふ革新的な存在として、我々の文学の領野に生れて来たものであります。だが、何ものも縁なくして生れるものはありません。民話もその先蹤をトルストイに持つて居ります」（犬田 一九三九）と述べている。犬田は伝承されてきた話を「民譚」と表し、「文学の領野」にある「民話」と区別していた。「文学」を附せずとも伝承されている「民話」を文学と意識する早川とは「文学の限界」に対する意識を異としている。トルストイがさうであったように、犬田の「民話」も伝承そのままではなかった。

柳田国男が民間伝承の学問を構築するすぐ隣、とまでは言えないかもしれないが、隣の隣あたりには、「民話」の語と共にトルストイの文学と思想が染みわたっていた。そこには、争いを

好まず、土を耕す思想としての「民話」があったのである。そして、農民の「民」、民衆の「民」が、「民話」「民謡」を対で想起させていた。

島崎藤村の『藤村読本』第六卷（研究社）は一九二六年の刊。芭蕉の俳諧について述べた後、トルストイの話題に移り、「労働と芸術」や「土」を考察する。さらに「民話」の節では、「詩歌の領分に民謡があるやうに、散文の領分に民謡があつてもいいわけだ。あのトルストイが後半生に、多くの民謡を書いたといふことも私達をうなづかしめる」と述べている。「民話について」（島崎 一九二八）や「いろはがるた」（島崎 一九三〇）で触れられている「民話」の語の使い方をみると、島崎藤村の「民話」は創作するものである。

(8)

『旅と伝説』が創刊された頃（一九二八年）の執筆陣に昇曙夢や白鳥省吾の名が並ぶ。同時期の『農民』に彼らが原稿を寄せていたことは先ほど見てきた通りだ。その二年前、『新潮』一九二六年「新年特大号」の目次より前、白鳥省吾『散文詩集 蒼空を見る』（文芸日本社出版部）の広告と昇曙夢編『第二新ロシヤ美術大観』（新潮社）の広告が、頁の裏表で隣り合っていた。

昇に関しては、もちろん、発行者の萩原正徳が奄美の出身であり、「島の先輩の露西亞学者昇曙夢さんが」（柳田 一九四四）

という人脈によるところも大きかったと思われる。しかし、「今後暫く翻訳に筆を断つに当つて、従来の事業を二先づ纏めて見た」（昇 一九二〇）と区切りをつけるまで、「ロシヤ文学が最も日本に影響を與へた時代の初期に於て、昇曙夢の時代があつたと言つてい、位みに昇曙夢は活躍した」（武者小路 一九三九）と評される人物だったことを忘れてはなるまい。シアの民衆文学をよく知る人物だったことを忘れてはなるまい。

「民謡」の語は、行楽の流行に彩を添える「新民謡 創作の中心」だけでなく、幅広く用いられている。「カチューシャの唄」を振り返る中山晋平の文章は「民謡作曲」（中山 一九二九）と題されている。あるいは、「遠里小野の草にうもれた民謡の古調を、新しい時代の精神に活かして、そこに郷土芸術の生粹を示せるもの」と広告⁽⁵⁾で紹介された野口雨情の書物の題は『雨情民謡百篇』、一九二四年に新潮社から刊行されている。『国民文学』誌上で「抒情にうまみがあつた」と評価された「民謡」は「最も多く纏つて作つた」とも言われている平井晩村の創作（河井 一九二九）。「民謡」は、様々な芸術的、商業的模索とともにあり、白鳥の「農民の魂」による「民衆詩」の発信もそのうねりの中にあつた。

こうした世の中を視野に入れながら、柳田国男は「民謡」「昔話」の語を強く押し出したのである。

「民謡」については、「今日の歌はぬ歌」すなわち和歌との対峙を意識し、さらに「歌つたらよからうといふ歌」や「歌はせ

たいものだといふ歌」について「民謡といふ語に近い名を以て、呼んで居る国は日本の他には無い」と、作詞・作曲される歌との混同を嫌う。柳田は「民謡」の語が、様々な創作の中で用いられていることを知りつつ、伝承される「ウタ」を「民謡」の名によって研究していこうとしている。「名前の相違の為に、我々の求め尋ねべき本物を見失はぬことだけは、用心をしてか、らねばならぬ」という態度だ。(柳田 一九二七)。「歌謡」の語との力学も作用していると思われるが、本稿では視界から外す。

対照的に「昔話」研究は、世に行われる「童話」の語を否定して構築する。「曾ては芸術を統一し思想を誘導した大なる力の一つが、今や僅かに機嫌買ひの、寝付きの悪い子供等の空想の中に、最後の残壘を保つて居ると知つた者は」「い、加減な今日の分類に任せては置かれぬのである」。したがって「或は童話を製作童話と伝承童話とに、分別すればよいといふ人もあらうが、そんなことは「自分等には出来ないのである」とする(柳田 一九二八)。

柳田は、これらの文章を新潮社『日本文学講座』の「科外講話」として、それぞれ第三卷(一九二七年一月)、第十六卷(一九二八年四月)に寄せた。「会員諸氏中、住所の御変更があつた際は、必ず新旧の住所を併せお知らせ下さい。さもないと、『講座』の不着延着等を免れません」と毎号に記される「文学講座」の読者に対し、「民謡」と「昔話」によって柳田は「口承文芸」を説き、仏教以前の固有信仰への道筋を描いてみせたので

ある。『新潮』一九二六年十月号に「予約出版全部十八卷」の広告がある。会費は「一ヶ月貳圓」。六ヶ月、十二ヶ月と前払いには割引があり、「全部参拾貳圓」。「予約締切十月廿八日期日迄に申込みあれ」。「文芸に志す人には是を薦む」の大文字の隣には「日本文学が一般民衆と握手し、また芸術としての本来の面目を以て、新文学の分野に乗り出すの時が来た」と書かれている。この号には「近時、農民文学乃至土の文学が旺んに提唱せられつ、ある」と書き起こされる高須芳次郎の「江戸文学に現はれた農民」もある。この頃の『新潮』誌面は、プロレタリア文学への関心をかなり強めているが、「農民文学」の言葉はあちこちに確認できる。トルストイの文学によって知った「民話」の語を、読者はまだ忘れていなかっただろう。翌年一月号の広告によれば、十二月に増版した昇曙夢訳『人は何によつて生くるか』(価七拾銭)は「二十三版」である。

『旅と伝説』創刊時の有力な執筆者であった旅行作家、松川二郎は、「昔話・伝説」研究に追われるようにこの雑誌を去つた後、『南の民話と民謡』を一九四三年に白揚社から刊行した。高天原を物語る「神話」や神々に由来する「伝説」、そして鬼退治をする桃太郎が、日本精神の表象として神聖視されるようになっていた。盧溝橋事件以後には「国民精神総動員」に突入する。皇国の「神話・伝説」に対し、外地や南洋の人々の伝承について「民話」の語が使い易かつただろうことも忘れるべきではない。蘆谷蘆村の表現を使えば「太平洋中の諸島や其他の原始的民族

の民話」〔蘆谷 一九三五〕である。

半世紀後に、犬田卯の妻、住井すゑが記している。「機関誌『農民』とは無縁ながら、この機にあきらかにしておきたいことがある。一九三八（昭和十三）年十一月の「農文学懇話会結成」である。会は時の農相有馬頼蜜氏の発議によるもので、土の芸術⁵を志す犬田は指弾された」（住井 一九九〇）。犬田らの「土の芸術」とナツ派との対立が深まるなどしていた戦前の農文学芸運動は、国策にその名を奪い取られて消滅した。

(9)

『遠野物語』刊行の一年前、佐々木喜善は一九〇九年（明治四二）六月二六日の『岩手毎日新聞』において「現代で世界第一位の文豪」と評価するのはアンドレエフだと述べていた。この新聞に佐々木が寄せた文章には、水野葉舟の名が頻出する他、ゴーゴリ、ゴーリキイ等、海外の多くの文学者への言及がある。藤沢衛彦編輯『伝説』創刊号（一九二六年）裏表紙、「執筆同人」には、松村武雄、蘆谷蘆村らと共に、吉江喬松、中山晋平、野口雨情、北原白秋、白鳥省吾の名が並ぶ。

あるいは、第八巻第一号（一九四二年）で「新たな目標」を掲げた『民間伝承』も、「下総開墾の見聞」の載っていた『郷土研究』も、題簽は会津八一。蘆谷蘆村の編集・発行する『童話研究』は昭和の代を迎え会津八一揮毫の表紙に改めていた。

大正期から昭和初期の「民謡」「民話」のあり方を掘り起こす

ことは、民俗学・口承文芸研究が生み出されてゆく際、培地を「文学」と共有していたのだと思ひ出すこともある。

戦後の民話運動は、「ゴーリキイの民話にたいする深い関心を除いては、よりどころとすべき学問的な先蹤を持たなかった」状況において始動している（益田 一九六〇）。トルストイの影響を強く受けた戦前の「民話」と直接的な連続性を見ることは難しい。ただし、伝承に興味を持った武者小路実篤が戯曲という表現を選んでいたことを思い出せば、「上演」という視点から「民話」を見直してみる必要が生じよう。

さらに、一九二七年に「私達の集りが、そも／＼大同団結であつて、各自の個性や思想やに存する小異を問はない一種の自由聯合」（『創刊の辞』）であつた『農民』が、「プロレタリア文芸は、遅かれ早かれ、農文学芸に依つて完全に止揚されるだろう」（『戦線は拡大された』（第二期）『農民』第一巻第一号一九二八）と再始動する際に加わつたトルストイアン加藤一夫が、「農文学芸の正系は、実に、神話や伝説や民謡や民間舞踊によつて伝へられたのである」という立場を表明している（加藤一九二八）ことを書き留めておきたい。坪田譲治が洗礼を受けた三田四国町の教会の牧師は内ヶ崎作三郎、副牧師は加藤一夫であつた（坪田 一九七二）。「神話・伝説」が軍国主義に利用される世の中であつて児童に向けて文章を書いていた坪田譲治が、一九四三年『鶴の恩がへし』（新潮社）にこめた思いはどのようなものであつたのだろうか。ともあれ、あらためて考えて

ゆくべき七〇年代以降の「民話」の活動の根本に、松谷みよ子
が「恩師である坪田讓治先生から借金したり」（松谷
一九七四）して出かけた「採訪」の旅があると捉えた時、戦前
の「民話」の意味は重みを増してくるはずだ。

うたとはなしとを並列させ、「土」の文学を模索するところに
「民謡」「民話」の創作活動が行われていた。文字を識る人々に
よる「民謡・民話」の試みを、戦後の「民話」の出発点となる
柳田国男監修『全国昔話記録』が享受される土壌として確認し
ておく。

〔注〕

- (1) 芸術座の巡業によって「カチューシャの唄」人気が再燃する
のみならず、『復活』が再び読まれることになった、という
新聞記事（一九一六年八月十二日付『米沢新聞』）の存在が
指摘されている（永嶺 二〇一〇）。なお、兵藤裕己は、「カ
チューシャの唄」流行の地盤に「唱歌教育や各種のはやり唄
の流行によってはぐくまれた近代日本の大衆の歌声」を見て
いる（兵藤 二〇〇五）。
- (2) 一九四七年の『口承文芸史考』には、「民族によつては人に
世間話の関心が乏しくて、集まれば直ちに珍らしい民話の類
を聴かうとする例もあつた」という「民話」の用例もあるが、
こちらは、初出時には「説話」とされていた。

(3) 『今昔物語集』巻第十三「天王寺僧道公誦法花救道祖語第

三十四」だと思われる。

- (4) 「トルストイ的生活を実践すべく田舎と自然へ還つたいわば
トルストイヤン」（阿部 一九八九）である加藤一夫を慕い
訪ねてきた青年たちがあり、彼らにトルストイを翻訳させて
洛陽堂から加藤一夫編『一般人叢書』（一九一七年）が刊行
された（田中 二〇一五）。坪田讓治は、第六編の訳者であ
る。この頃、加藤が刊行する雑誌『科学と文芸』の編集を、
坪田は手伝っていた（坪田 一九七二）。

(5) 『現代童話講話』（西條 一九二四）の巻末に掲載された広告。

- (6) 黒島伝治は、「大衆的闘争の中にある農村通信員の運動とか
たく結合し」「進むことによつて、われ／＼の文学は、闘争
する農民大衆自身のものとなる」（黒島 一九三一b）と述
べ、『土の芸術』とか『農村の文化』とか、農村を都市に対
立させて、農民は、農民独自の力によつて解放され得るが如
く考へてゐる無政府主義的な軍農主義者等」（黒島
一九三一a）を「農民を解放に導かない文学」（黒島
一九三三）と批判した。ただし黒島は「聞く文学」としてト
ルストイの民話を評価する（黒島 一九三三）。なお、引用
はいずれも『定本黒島伝治全集』第四卷（二〇〇一 勉誠出
版）。

- (7) 『佐々木喜善全集』第三卷（一九九二 遠野市立博物館）所
収。

〔文献〕

蘆谷蘆村「世界童話史」日本童話協会編纂『総合童話大講座 童話史』一九三五 日本童話協会出版部

阿部軍治「徳富蘆花とトルストイ―日露文学交流の足跡―」

一九八九 彩流社

飯倉照平『南方熊楠の説話学』二〇一三 勉誠出版

大田卯「農民の文芸とトルストイの民話」『教育研究』第三〇五号

一九二六 東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会発行

——『農民文学入門』一九三九 大観堂書店

——『日本農民文学史』一九五八（小田切秀雄編）農山漁村文化協会

上田敏「伊曾保物語考」『史学研究会 講演集第四冊』一九二二

（引用は『定本上田敏全集』第九卷 一九七九教育出版センター

講演は一九一〇年）

大岡信「プロレタリア詩とその周辺」（伊藤信吉との対談）『文学』

第五三卷第一号 一九八五

尾崎実子「父葉舟の思い出」『明治文学全集』月報四九 一九六九

筑摩書房

加藤一夫「農民文芸の正系」『農民』（第二期）第一卷第一号

一九二八

河井醉茗「晩村の民謡」『国民文学』第一七六号 一九二九

北原白秋「黎明の考察」『詩と音楽』第二卷第一号 一九三三

黒島伝治「農民文学の問題 一」『東京朝日新聞』一九三二年四月

二十二日（a）

——『農民文学の正しき進展のために―ナツプ派より「農民」派への駁論―（下）』『読売新聞』一九三二年六月五日（b）

——『聞く文学』『聞かせる文学』三二『東京新聞』一九三二年二月六日

月六日

——『農民文学の展望』『農民の旗』第二卷第一号 一九三三（日本プロレタリア作家同盟）

西條八十『現代童謡講話』一九二四 新潮社

重信幸彦「お話」と家庭の近代」二〇〇三 久山社

島崎藤村「民話について」一九二八（引用は山崎斌編『藤村の手紙』一九三五 新英社）

——『市井にありて』一九三〇 岩波書店

杉井六郎「小崎弘道の東京伝道と『六合雑誌』の発刊」同志社大

学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会編『日本の近代化

とキリスト教』一九七三 新教出版社

住井すゑ「序―ものがたり』『農民 解説・総目次・索引』一九九〇

不二出版

関敬吾「編者ノート」『島原半島民話集』の思い出を中心に』『全

国昔話資料集成二一 島原半島昔話集』一九七七 岩崎美術社

高山旭「民話とトルストイ」藤沼貴編『ロシア民話の世界』

一九九一 早稲田大学出版部

田中英夫「洛陽堂 河本龜之助小伝」二〇一五 燃焼社

坪田讓治「対談 II」（菅忠道との対談・一九六九）編者代表 関

英雄・水藤春夫『坪田讓治童話全集 別巻 坪田讓治童話研究』

一九七一 岩崎書店

永嶺重敏『流行歌の誕生―「カチューシャの唄」とその時代』

二〇一〇 吉川弘文館

中山晋平『民謡作曲』『アルス西洋音楽大講座』第七巻 一九二九

アルス

西田勝「解説」『復刻版 火鞭・ヒラメキ』一九八五 不二出版

昇曙夢「本集の発刊に就いて」『露西亞現代文豪傑作集』全六巻・

一九二〇 大倉書店

早川孝太郎『三州横山話』一九二二 郷土研究社

――『猪鹿狸』一九二六 郷土研究社

――『民話文学の一概念』『日本文学講座』第二巻 一九三四 改

造社

兵藤裕己『演じられた近代―〈国民〉の身体とパフォーマンス―』

二〇〇五 岩波書店

本多秋五「トルストイ『民話』『世界文学辞典』一九五一 中部

日本新聞社（引用は『トルストイ論集』一九八八 武蔵野書房）

牧千夏「創始期の農民文学論争―プロレタリア文学・郷土芸術・

文明批評―」『国語と国文学』第九五巻第六号 二〇一八

益田勝実『民話研究の歴史』木下順二編『日本の民話』一九六〇

毎日新聞社

松谷みよ子『民話の世界』一九七四 講談社

丸山学「基準説話と類話―昔話研究途上の問題―」『昔話研究』第一

巻第六号 一九三五

水野葉舟「下総開墾の記録（二）」『日本文学』第一七〇号

一九二九（a）

――『下総開墾の記録（四）』『日本文学』第一七三号 一九二九

(b)

――『宮沢賢治氏の童話について』草野心平編『宮沢賢治研究』

一九三九 十字屋書店

武者小路実篤『文壇諸家感想録（昇先生還暦記念刊行会編）』昇曙

夢訳『六人集と毒の園』一九三九 正教時報社

柳富子「トルストイの『イワンの馬鹿』―日本における変容の一

考察』伊東一郎編『ロシアフォークロアの世界』二〇〇五 群

像社

柳田国男『民謡の今と昔』『日本文学講座』第三巻 一九二七 新

潮社

――『昔話解説』『日本文学講座』第十六巻 一九二八 新潮社

――『昔話覚書』『昔話研究』創刊号 一九三五

――『隨筆民話序』高田十郎『隨筆民話』一九四三 桑名文星堂

――『月曜通信』旅と伝説』について』『民間伝承』第十巻第三号

一九四四

吉田精一『自然主義の研究』下巻 一九五八 東京堂

（のむら・のりひこ／千葉大学非常勤講師）